

山王宮の棟札

令和6年、山王山の頂に鎮座する雄嶽日枝神社(「山王宮」)の本殿建て替えに際して、江戸時代中期から昭和にかけての棟札が約20枚発見されました。表1は江戸時代の棟札を表したのですが、そのうち、2番から9番の棟札が新たに発見されたもので、現在(令和8年2月時点)棟札の一部は新上五島町鯨賓館ミュージアムで展示されています。

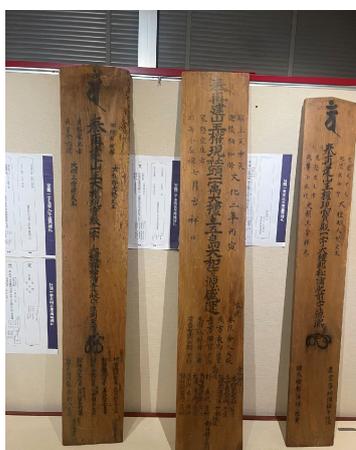
山王宮が位置する荒川地区は、江戸時代、平戸藩及び五島(福江)藩の両藩が支配する二方領でした。そのため、棟札は、両藩からそれぞれ奉納されました。各棟札には、藩主や家老などの名前が記されており、両藩から山王宮が重要な地として祀られていたことがうかがえます。

『濱ノ浦村郷土誌』(長崎歴史文化博物館蔵)の雄嶽日枝神社の説明には、「平戸五島二方に属せしを以て社殿の建築は両藩に於て之を営し、毎年祭礼には両藩代官下役等必ず参列する等誠に厳格を極め、氏子以外の尊信に厚く、春秋二季の大祭には遠近参詣者山に満つるの盛況を呈したりき」と記されています。残念ながら、当時の山王山の大祭の盛況ぶりを示す資料は見つけれませんでした。遠くからも参拝客が多く訪れていたことがうかがえます。

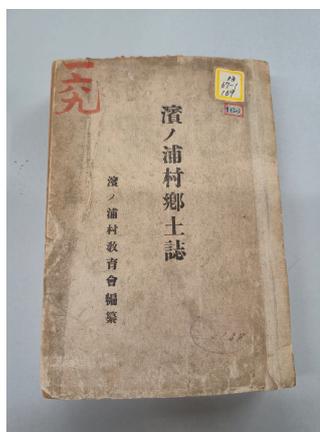
なお、現存する江戸時代の棟札は、平戸藩から6枚と五島藩から4枚の計10枚。両者の特徴としては、平戸藩主は自らを「大檀那」称し、山王権現宝殿の再建(興)に対して寄付。それに対して五島藩主は自らを「大檀主」と称し、山王権現社頭の再建に対して寄付を行っており、両者の役割の棲み分けがなされていることが分かります。天明5年(1785年)7月及び文政3年(1820年)6月はそれぞれ同時期に棟札が奉納されています。

また前述の『濱ノ浦村郷土誌』には「毎年祭礼には両藩代官下役必ず参列する」と書かれていますが、代官はどのような存在だったのでしょうか。表1で、天明5年(1785年)7月以降に平戸藩の代官として登場する末永甚八について、次回(その3)で取り上げます。(つづく)

【長崎県文化振興・世界遺産課 矢島貴子】



山王宮の棟札(新上五島町鯨賓館ミュージアム蔵)



『濱ノ浦村郷土誌』浜ノ浦村教育委員会、1918年。
(長崎歴史文化博物館蔵)



絵図に書かれた山王山(「旧五島平戸相持領図」長崎歴史文化博物館蔵)

【表 1 荒川山王宮の江戸時代の棟札】 両代官情報を中心に記載

	年代	題	藩主	平戸代官	福江代官
1	天和3年11月 (1683)	奉再興山王廿 一社権現宝殿 一字	[平戸第4代]大檀越 松浦肥前守源鎮信	小値賀代官 駒井七太夫	入江源之丞
2	宝暦9年6月 (1759)	奉再興山王大 権現宝殿一字	[平戸第8代]大檀那 松浦肥前守源朝臣誠 信		
3	天明5年7月 (1785)	奉再建山王大 権現宝殿一字	[平戸第9代]大檀那 松浦壱岐守源朝臣清	末永甚八	入江源之丞
4	天明5年7月 (1785)	奉再建山王権 現社頭	[五嶋第8代]大檀主 五嶋近江守源盛運	末永甚八	入江源之丞・入江 儀左衛門
5	文化3年7月 (1806)	奉再建山王権 現社頭一寓	[五嶋第8代]大檀主 五嶋大和守源盛運		入江彌三太夫照 武・荒木久米右衛 門輝長
6	文化5年2月 (1808)	奉再建山王権 現宝殿一字	[平戸第10代]大檀那 松浦肥前守熙		
7	文政3年6月 (1820)	奉再建山王権 現宝殿一字	[平戸第10代]大檀那 松浦肥前守源熙	末永甚八	入江彌三太夫照 武・入江祥平政方
8	文政3年6月 (1820)	奉再建山王権 現社頭一字	[五嶋第9代]大檀主 五嶋大和守源盛繁	末永甚八	入江彌三太夫照 武・入江祥平政方
9	嘉永3年 (1850)	奉再建山王大 権現宝殿一字	[平戸第11代]大檀那 松浦壱岐守源曜	末永甚八	大坪一平・入江憲 蔵
10	嘉永3年9月 (1850)	奉再建山王権 現社一字	[五嶋第11代]大檀主 五嶋左衛門尉盛成	末永甚八	大坪一平長治・入 江健蔵秀